

## I o T新時代の未来づくり検討委員会 人づくりWG (第2回)

○日時：平成29年12月25日(月)15:00~17:00

○プレゼンター

- ・文部科学省 安彦様
- ・アドビシステムズ株式会社 増渕様、慶應義塾大学 渡辺様
- ・特定非営利活動法人 CANVAS 石戸様
- ・横浜すばいす 古川様
- ・総務省情報通信政策研究所 香月部長

○主な議論

- ・20年前から行われているデンマークの教育改革では、学校は、知識ではなく「勉強の方法」を、課題解決ではなく、課題発見の方法を教える。また、ディベートではなく、AとBという対立した意見からCという新しい考え方をどう作るのかという「ダイアログ」を教える。こうしたことによって、イノベーティブな人材が輩出されるというプラス面がある一方、基礎的知識が不足した人が増えるという現象も生じている。
- ・プログラミング教育について議論する上では、国の方向性として、イノベーティブな人を育てるのか、全員の知識をある程度均一に保ちつつ底上げするのかについて議論する必要がある。
- ・学校では外部の講師を招くことが難しい。総務省において、プログラミングやAIの勉強を地域と一緒に教えていく取組を行うべき。
- ・これからは識字率が「識プログラミング率」とでもいうべきものになるかもしれない。若い世代ほど抽象的、論理的思考力が高くなることに期待したい。他方で、AIのネットワーク化が進むことにより、漢字が書けない、ナビで認知機能が維持できないなど、人間が本来持っていた能力を失うことがないよう、自然体験、生活体験、学習体験等の必要性、重要性に目配りしていくことが必要。
- ・パソコンの普及率が低下しているといわれる中で、学校でプログラミングを教えていくためには、現場の先生のICTの資質が必要。
- ・今回伺った教育の新たな潮流は、ICTインフラの整備状況に基づく地域間格差を生むことになりかねない。どのような教科にどの程度のレベルまでICTを導入していくのか、教育現場への可能な限り速やかな情報提供を望みたい。
- ・また、学校における新しいソフトウェアの導入、更新や、ヘルプデスクの設置について、事業者任せると重いコスト負担が生じることが課題になっている。
- ・学校現場では今日の議論を全て受けきることはなかなか難しい。学校以外、教育行政以外の団体とが望ましい形で協力をしながら、あるいは役割をシェアしながら子どものプログラミング教育を進めていくことが現実的。